

# 探検・探査

8号

2000年7月

横浜市立大学 探検・探査の会

# 探検・探査の会 第8号

## 目 次

ボリビア隊の隊員諸君へ	幹事長	小森 享二	1
尾瀬リーダー冬季講習会	宮崎 捷二		3
ボリビア日本人移民100周年記念 アマゾン・マードレ・デ・ディオス川追跡調査報告から			
探検隊全行程			6
インカトレッキング報告			8
インカトレッキングについて	門間奈々		10
マードレ・デ・ディオス川下り			13
アマゾンの「カ」	本多 肇		17
ボリビア移住100周年記念取材報告 および南米アマゾン日誌 マカレナの森で (毎日新聞連載)	大槻英二		20
2000年・横浜市立大学探検探査の会総会 議事録			35
1999年度探検探査の会会計報告			36
会員近況紹介			37
会員登録			40
編集後記			

## ボリビア隊の隊員諸君へ

幹事長 小森 享二

ボリビア隊は大きな成果を上げ無事帰還した。そして一連の活動の締めくくりである立派な報告書も作成された。ボリビア隊の隊員諸君にどのような言葉を投げかけたらいいのか少々戸惑いを覚えるが、「よく頑張ったね。お疲れ様。よかったです。よかったです。そして有り難う。」と言いたい。

確かボリビア隊が準備をし始める頃から例の横浜市立大学医学部付属病院での事故で横浜市大のイメージは相当ダウーンしていたと思う。私達には直接関係ないものの、やはり気になる事件であった。それに引き換え、ボリビア隊の快挙は市大関係者にとって喜ばしい出来事であったに違いない。学長が最近の卒業式や入学式で探検部の活躍について言及していたということを聞いた。直接に責任はないものの市大病院のことがあつただけに学長もさぞボリビア隊の成功を喜んだことと思う。

OB としての私は久々の大掛かりな探検部あげての海外遠征ということで、遠征の成功を期待すると同時に無事帰還してくれることを切に願っていた。そして無事、遠征を終えて帰国したという知らせを聞いた時には本当に心底安心すると共に嬉しかった。大学を卒業してからは探検的活動からは遠ざかって久しい。現役の諸君がいろいろ計画して活動を推進しているのを知ると、ついつい自分の心までがわくわくして来る。ボリビア隊が遠征している間は今頃どのあたりで、何をしているのだろうか、全員無事で活動しているのだろうかと、思いを巡らせていた。私はボリビア隊に大した援助はできなかったが、逆にボリビア隊から精神的に与えられたものが多くあるような気がする。そのような意味からも、これから多くの隊が編成されて皆の心をいろいろな所へ連れていって欲しいものだ。

今回の遠征は 1998 年 4 月 19 日の「探検・探査の会」の総会において OB の穂積氏がプランを発表したことが発端であると記憶している。初めて、そのプランを聞いた時は探検部にとって初めての南アメリカ大陸というフィールドであるし、100 年前の日系移民のルートを辿るという企画もなかなかおもしろそうだと思ったが、実現するのは経済的にも、安全確保の面からも相当難しいのではないかと感じた。しかし、現役の探検部員を中心に計画は着々と進められ、偵察隊の派遣を含めて、約 1 年半かけて所期の目的が達成された。今回の遠征に OB は隊員としては参加していないが、遠征の切っ掛けを作ったり、現地でのサポート、そして OB のジャーナリスト、大槻氏や佐藤氏による報道などで結構最後まで繋がりが継続された。現役部員と OB とがこのように協力関係を保ちながら探検活動を

推進していくやり方は今後の活動に大いに参考になると思う。

今回の遠征の成功要因は探検部の諸君が頑張ったことが第一であるが、他に、まず企画が良かったこと。経済的スポンサーに恵まれたこと。ボリビア政府の全面的支援が得られたこと等があったと思う。一方、成功を阻害する要因も多々あったと思う。隊が学生、社会人、他大学、日本人、ボリビア人、という混成チームであったこと。複雑な指揮系統。等々、数え上げればきりがないほどであったであろう。それらの困難を若い諸君がむしろバネにして乗り越え、最終的に目標を達成できたことは隊員諸君の努力に負うところ大である。帰国後、ある隊員から今回の活動は軍に守られ、決まったルートを移動しただけで、余り探検的ではなかった。というような感想を聞いたが、だからといって今回の遠征が探検活動として価値が低いとは私は思わない。

探検活動にはいろいろな形があっていい。私達がフィリピンへ遠征した頃はまず経済的な準備が大変であった。貨物船に便乗させてもらって経済的負担を少しでも軽くしようとするのであったが、貨物船特有のスケジュールがなかなか定まらないという欠点があった。しかし、約30年前のことと、経済的にも交通手段にもまだ恵まれていないことから、海外の余り知られていない土地へ行くだけで探検活動になった。こういう点はある意味で私達の時代は恵まれていたと言えるだろう。

時代の変化とともに探検活動を行う上での困難さが変わって来たように思える。今回の隊員諸君は私達が活動していた頃とはまた違った困難を味わったに違いない。そして、今回のスポンサー付き、ボリビア政府との合同という遠征も新しい探検活動の形で市大探検部としては新境地を切り開いたと言える。確かに経済的、安全面で恵まれたところがあつたが隊員はそれぞれの立場で諸々の困難に遭い、それらを克服しながら遠征をやり遂げた筈である。私はそのことに隊員諸君は自信と誇りを持っていいと思う。隊員諸君はこの遠征を通じて掛け替えのない経験、体験を身につけた。これは一生ものだ。帰国してまだそれほど時間がたっていないので、身についたものがどれほどのものは、まだ実感できないでいるかもしれない。しかし、これが時を経るに従って強く感じられて来るものだ。それは懐かしむとは違った思いである。自分は確かにあの厳しい環境に対峙し、克服したという自信のようなもので、それは心の奥底に刻み込まれている。

今回の遠征で隊員諸君は必ずこれから的人生において糧となる経験、体験をそれぞれの立場で頑張った分だけ獲得したと思う。

だから、何か大きな力を自分自身に取り込んだ諸君の将来が私は楽しみだ。  
諸君の今後の奮闘を期待して止まない。

# 尾瀬リーダー冬季講習会

= 群馬高校登山部一つの記録 =

1995年卒 宮崎捷二

## ☆春休みの雪の尾瀬で

2000年3月26日(日)

沼田駅からのチャーターバスは11:14に尾瀬戸倉に向け動き出した。群馬県北部は予報では大雪とのことだったが、椎坂峠・片品の谷間はその気配は全くない。しかし、鎌田の集落を過ぎるころから舞い始め、車窓から真北に見えるはずのアヤメ平の雪線や雪庇は望めず、やがて周りは一面白に変わってきた。尾瀬戸倉の通称並木駐車場での開会式も積雪の上・降雪の中だった。今年の「リーダー講習会」の参加校は21校、生徒は男女で約110名、顧問教師は35名ほどになった。午後の日程は、班長教師を中心に男子4班・女子3班に編成し、すぐ近くの並木ゲレンデ跡地で、明日からの行動に備えて、つぼ足歩行・ワカンジキ歩行・ラッセル・読図コンパス訓練を積む。この時季にしては例年にはない大雪で訓練には好都合だった。初日の夜は、戸倉の地・富士見旅館での素泊まりだ。館外は、夕餉の準備の石油コンロの元気な音、それぞれのパーティーの調理の匂い。食後は大広間を借りての全体ミーティングで、ワカンジキの縛り方・ガスコンロの取り扱いのポイントなどを学ぶ。班別ミーティングでは雪鋸・雪スコップなどの装備点検・分配をして明日以降に備える。当リーダー講習会は3泊4日の日程で行われ、2泊・3泊目は、富士見峠の西に位置する富士見小屋を掘り出して使わせてもらうのだ。

## ☆あんれまあ小屋がない?

2000年3月27日(月)

起床時にはほんのり舞っていた雪も、集合出発時刻頃には、空の青壁に白色の下弦の月がはめ込まれていた。班ごとのミーティング後、6:30には色とりどりのヤッケ・スパッツ・ザックカバーの隊列が動き出す。2日前の時季はずれの大雪のために大型圧雪機が動き回る戸倉スキー場を通り抜け、硫黄沢沿いのルートを富士見峠へと向かう。例年ならば崖からの水の滴りなどに、春の気配が多少なりとも感じられるのだが、ワカン歩行でさえ膝より上まで沈む。もっと早く着いた班もあるが、小生担当の女子班は、8:45に富士見下に着く。ここまで夏場は車が入れるなど歩きだ。30分程休憩して動き出す。夏道を辿ればジグザグだ、雪の上なら自在にルートをつくれると、直登気味に進む先頭パーティーはただならぬ大雪のラッセルに喘ぐ。富士見下から約1時間、落葉松林の中にポツカリと平らな空間をしめる田代原に着く(ここは湿原だが地図のルート上には無く、夏季には踏み込むことは

できない）。アヤメ平から南に張り出す雪庇がはっきりと見え、雪煙も上がっている。読図・コンパスワークの説明をする班長もいる。昼食を含めて約1時間のくつろぎ後、11:15踏み跡を沢山残した田代原から再び富士見峠へと向かって動き出す。地図上の夏道を辿らず、途中から冬路沢沿いにルートをとり、渡渉後左岸を更に遡り高度を徐々に上げていく。不意にいくつかの爆音を残し、いくつかのヘリの機影が頭上を通過した。しばらくすると一緒に歩を進めていた富士見旅館・富士見小屋主の萩原さんの携帯電話に「尾瀬の山小屋の雪下ろし要員を乗せた新日本ヘリが、離陸直後尾瀬沼近くに墜落した旨のNHKのニュース速報がつい今しおあった」との情報が入る。「怪我人はいるが死者は無い模様」の続報も入る。その後も何機か通過して行く。

あんれまあ小屋がない？ 14:00 西と東の切り妻部分が、わずかに小屋であることを示しているほどに、すっぽりと雪に埋もれた富士見小屋に到着だ。こんな大雪は小生にとっても初めて。30分程休んでから小屋掘り出しの作業に合流する。とりあえず二階の窓の上縁までの雪を取り除き、ザックの荷物を運び入れる。一階からの出入り口を開けるのに何と4時間以上も費やすことになった。真っ暗な小屋の中も小屋主のご好意で自家発電の灯がともる。夕食準備の活気の最中、班長ミーティングでは本日の行動の報告と反省点を出し合い翌日に備える。食後、生徒たちは班別に分かれたミーティングで、それぞれの学校の今日の反省と明日の行動を確認し、ひんやりとしたシュラフに潜り込む。

## ☆ 雪洞掘りの訓練も

2000年3月28日(火)

4:00を境に1階のフロアは活気を取り戻す。食事を済ませ、サブザックに必要装備を詰め込んで、6:30の薄日射す屋外での全体集会後班別行動に移る。午前中は読図・コンパスワークの訓練をしながら、白尾山、皿伏山、荷鞍山方面を歩き回るが戸倉から峠へのラッセルに較べて、雪が思ったよりも締まっていて歩きやすい。午後の行動は富士見峠のすぐ北の斜面を利用しての雪洞掘り訓練だ。雪洞の設置地形の判断、雪鋸・雪スコップの使い方や、四角いブロックにしての雪の掘り出し方などを学ぶ。自分たちの手になった雪洞の中に身を屈め、充分に満足感に浸る間もなく、スキーを使っての緊急橇の組立て方や、模擬怪我人を仕立てての運搬の実演を見学したり、実演に加わったりして16:00頃には全員が小屋に戻る。再び夕食準備の活気の最中、昨日と同様班長ミーティングを開いて翌日に備える。19:00からは群馬県山岳連盟に所属する山岳会のメンバーによる「講演」、講師も群馬の高校登山部で育ち世界の屋根に挑戦している優秀なクライマーの先輩だ。8000m峰の全座征服に挑戦し志半ばで、植村直巳と同じく冬のマッキンリーに散ってしまった沼田市出

身の若き登山家・山田昇も、この冬季講習会から育ってゆき「講演」をしてくれたこともあった。

「講演」後は生徒たちは学校間交流、顧問たちも全体集会・交流会。21:30には発電機の音も消え小屋に静けさが戻る。

### ☆雪崩に道をふさがれて

2000年3月29日(水)

お世話になった小屋の清掃を済ませ、快晴の下の朝の集会後3日前のルートを戻り下る。田代原では多くの班が車座になっての反省会だ。富士見下への途中、本講習会にとって初めての、数時間前に発生したと思われる雪崩によるルート寸断に見舞われ、危険を回避し急斜面の腐りかけた雪の下りを、腰まで沈みショートカット。

12:10 雪も融け舗装面もすっかり乾いた並木駐車場での閉会式で、今年の講習会も無事終える。雪焼けした笑顔で新しい友との再会を約束する生徒たち。

### ☆27回目を数える講習会

このリーダー冬季講習会が始められたのは、1973年のことである。それまでの5年間は同山域で、準備期間として各高校の登山部顧問を対象にした冬山指導者講習会をもち、ルートの検討や安全性を確かめてきた。

1973年と言えば、小生が群馬の高校に勤め始めて8年目、丁度登山部の顧問になった年である。その時にはまだ拘わっていなかったが、それから数年後には冬山指導者講習会・リーダー冬季講習会に参加するようになり、更には登山専門部の役員を務めるようになり、班長も何度か経験してきている。ルートもその当時は地図上の夏道を辿ることが多かったが、アヤメ平から張り出す雪庇の下を通らざるを得ないので、その危険を回避するために、田代原を起点に、アヤメ平から南に張り出す尾根筋を上がるコース・白尾山の西に位置する電波中継塔をめざして登り上げるコース・冬路沢に沿って直接富士見小屋に向かうコース等を開いてきた。

多い年には参加者が200名を越えることもあったが、幸いにも事故が起こらずにやってくることができた。

### ☆80数回もの転倒の末に

指導者講習会についてはスキーで登り上げ、“シール外してパイプの煙……”。峠の一夜は隔年でテント泊・雪洞泊を取り入れている。今では歩行用の踵が上がるスキーの締め具も安価になり、小生のスキー技術も多少向上したが、2mもの重い板に踵固定の普通の締め具、未熟な技術で80数回の転倒の末やっと下山した初参加当時の思い出が懐かしい。

## ボリビア日本人移民 100 周年記念追跡調査探検隊全行程

月日	曜日	ラパス隊	リマ隊
8月 2日	月	成田発	成田発
8月 3日	火	ラパス着 ガリンド大使主催晩餐会	リマ着
8月 4日	水	日本ボリビア共同ミーティング 市内観光	国会議員 MATUDA 氏表敬訪問／文部省表 敬訪問／ペルー新報表敬訪問／日本人協会 表敬訪問
8月 5日	木	インカ道トレッキング開始	ボリビア大使館夕食会
8月 6日	金	インカ道トレッキング	リマ発→ペルトマルドナード着
8月 7日	土	花村氏訪問	日本人墓地訪問／カヌー訓練
8月 8日	日	インカ道トレッキング終了	
8月 9日	月	記者会見／ジャイカ、日本大使館表敬訪問／ テレビ局取材	
8月 10日	火	ラパス発→クスコ着 市内観光	
8月 11日	水	マチュピチ観光	カヌー訓練
8月 12日	木	クスコ発→ペルトマルドナード着 日本人隊合流／カヌー共同訓練／日本ボリビア共同ミーティング	
8月 13日	金	カヌー共同訓練／マルドナード市長主催夕食会／日系人主催歓迎会	
8月 14日	土	川下り出発式典(強風により出発は延期となる)	
8月 15日	日	川下り開始 マルドナード発	
8月 16日	月	ヒース着	
8月 17日	火	支流探索(エコボリビア宿泊)	
8月 18日	水	ヒースへ帰還	
8月 19日	木	ヒース発→チベ着 サンファンの方々合流及び歓迎会 室、体調不良のためコビハへ	
8月 20日	金	チベ発	
8月 21日	土	室、医師の診断により計画に戻る事を許され合流	
8月 22日	日		
8月 23日	月		
8月 24日	火		
8月 25日	水	セナ着 レセプション／歓迎会	
8月 26日	木	セナ発 高橋体調不良によりリベルタへ	
8月 27日	金		
8月 28日	土	大矢体調不良のため艇を下りる	
8月 29日	日		
8月 30日	月	佐藤氏合流／リベルタのテレビ局より取材	
8月 31日	火	リベルタ着 到着式典／リベルタ市長表敬訪問	
9月 1日	水	慰靈祭参加／日本人協会記念式典参加／日系人の方ど昼食会／ガリンド大使主催夕食会	
9月 2日	木	トゥミチュクワ湖観光	
9月 3日	金	リベルタ発→カチュエラ・エスペランサ見学→グアヤラメリー着 日系人主催夕食会	
9月 4日	土	グアヤラメリー発→リベルタ着 日系人協会主催夕食会	
9月 5日	日	自由参加による日系人の方との交流	
9月 6日	月	佐藤氏による日系人の歴史についてのレクチャー／日系人のお宅で夕食会	
9月 7日	火	リベルタ発→コチャバンバ着	
9月 8日	水	市内観光／ガリンド大使宅で川下りのビデオの上映会及び夕食会	
9月 9日	木	コチャバンバ発→サンタクルス着	
9月 10日	金	サンタクルス発→オキナワコロニア着 移住地の歴史についてレクチャーを受ける／ 日系人協会主催夕食会	

9月 11日	土	オキナワコロニア発→サンファン着 各人ホームステイ先へ移動
9月 12日	日	幼稚園運動会訪問／資料館見学／移住地内見学
9月 13日	月	小中学校見学／病院見学／農協見学／上園氏再訪記念及び探検隊慰労会
9月 14日	火	サンファン発→サンタクルス着
9月 15日	水	追跡調査探検隊の計画終了におけるレセプション
9月 16日	木	サッカーチーム「タフィチ」訪問
9月 17日	金	日本人探検隊解散

## インカトレッキング

### 目的

8月6日より8月10日までの3泊4日で、高度5000mから1500mまで徒步にておりる。主たる目的として、行程中に隠棲していらっしゃる戦後日本人移民の花村民次氏に会い、氏の経験談を拝聴すること。また、この旅の根底にある目的としての100年前の移民の方々の足跡を実体験に基づき理解するということである。

装備：今回の追跡調査は、国ぐるみの大きな計画であるという特質性より、ポーターがついてくれるなど、通常の探検部の計画と性質を異にする。ここでいう個人装備とは、個人の携帯した装備であり、共同装備をポーターの持ったものとする。

個人装備：ザック・シェラフ・シェラフカバー・テントマット・カッパ・トレッキングシューズ・防寒具(フリースなど)・医療パック・ポリタン・ナイフ・コッヘル・ライター・フィールドノート・ヘッドランプ・電池・コンパス・ソーイングセット・カメラ・トイレットペーパー・ビニール袋・服・靴下・下着・帽子・手袋・タオル・歯磨きセット・日焼け止め・石鹼・非常食・個人の判断による嗜好品など

共同装備：テント・火器・調理用鍋・食糧・水

メンバー：トレッキングには全員が参加したわけではない。ペルーのリマで川下りの準備を進めている人間と今回のトレッキングに参加する者とに分隊している。

日本人隊：隊長 片平吉秀。記録 熊原武博。記録 福榮太郎。装備 本間俊一。装備 本多肇。通訳 多田真由美。中央大学教授 国本伊代。

ボリビア隊：ナビゲーター グアラチ。特別参加 ニッキー。ポーター3名。食糧係 1名。

行程記録：目を見張るのは、植生の変化だった。標高5000mには草すら見当たらず、腰を屈めてみると、苔のような高山植物が散在するだけであった。しかし、一泊目の標高3500前後ではすでに低木が見られ、二日目には高木が道の両脇に覆い被さってくる。三日目の花村民次氏宅付近には、自生ではないのかもしれないが、バナナの木が果実の房を実らせている。気温は5000m付近では摂氏0度前後。最終日の1500m付近では30度足らず。気温差にして30度近く、水と風呂のお湯などの差がある、といえば想像に易いかと思う。その間の植生の変化というのは、想像を絶するものがある。その行程を徒步で経験するというのは、非常に貴重な経験であった。

また、二日目の夜に見た星空と螢の光には、一同異口同音にその景色の現実離れした神秘さを述べている。月に照らされ暗いシルエットとなった木々に無数の螢がとまり、短い一生を飾るように、オスたちがメスへ愛慕の情を灯している。それは12月24日のモミの

木よろしくといった様だった。天上にはサザンクロスが、また無数の星々が瞬き、このような場で神を語るのはいかがなものかとも思うが、その存在をどこかで感じざるをえないような景色だった。

もちろんこのようすばらしい経験ばかりではない。標高 5000m というと日本一高い富士山よりさらに 1500m 以上高い。初日には高山病にやられ寝込んでしまった隊員も少なくない。また防寒を徹底したといつても氷点下を下回る寒さと、最終日の亜熱帯に近い暑さとの温度差には苦しめられた。体の隅に残る時差ぼけの疲労と、登らずに「下る」という日常において余り使わない筋肉の悲鳴。ただ、このような困難も心地よいと思えるほど充実した経験ではあった。

また、100 年前の日本人移民の方々へ思いを巡らすと、彼らは私たちとは逆に登っているわけである。道の傾斜は場所によって変化はあるものの概してきつい。また彼らが山越えを試みた時期というのは乾季と雨季の間で、山は吹雪く季節となる。その中彼らは私たちのような防寒着もなく、街で買った毛布を体に巻き付け、山を越えたそうである。中には家族連れで試みた人々もいるらしい。当時の移民の方たちは、働き盛りの 20 代 30 代の独身男性が主だったそうだ。それでも吹雪く 5000m 級の山をたいした装備もなく、越えたというのは、現実下っただけで顎の上がった私たちには、想像を絶するものだったのだろう。一歩間違えれば、死。彼らの前には常に死線がちらついていたのではないだろうか。今回のトレッキングを通して、当時の移民の方々のフロンティアスピリットを痛感した。

**四方山話**：ナビゲーターにグアラチという登山家がついてくれた。彼はエベレストに二度アタックし、一度は成功している南米でも有名な登山家らしいのだが、見た目はただの気のいいおっさんである。彼に言わせると「フジヤマ？ フン ベイビィ マウンテン」だそうだ。他にも女性の口説きかたの指南だとからくでもないことしか教えてもらわなかつた。もちろんろくでもないことしか聞かなかつた我々にその原因はあるのだが。そんなものだから私の彼への理解とは、前述通り気のよいおっさんである。しかし、そのイメージは日本に戻つてから覆されることになる。この時分隊としてリマに滞在していたメンバーの一人が、日本に戻ってきてからのミーティングでボリビアで買つてきた切手を見せていて。そのときどうも見たことのある顔が切手になつていて思つてはいると思つていて、グアラチその人ではないか。一同騒然。その切手に描かれている毅然とした彼の顔のしたには、小さな文字でグアラチと記されている。間違いない。彼は偉かつたのである。切手に描かれるような人間を前にして…。一同絶句。覆水盆に帰らず。後悔先にたたず。ただ今でも彼のことを思い浮かべると「げへっへー」という笑い声が聞こえてきそうだ。

(注：花村氏のことに関しては「日系人」のところで詳細を説明する)

## インカトレッキングについて

門間 奈々

今回の趣旨の中に「100年前に日本人移住者が辿った足跡を追う」というものがある。それに関連してマードレ・デ・ディオス川下りと山越えが計画された。本来ならばペルーからボリビア国内へ抜けるルートを行かなければならないのだが、現在そのルートは大変治安が悪い(山賊出現の噂アリ)らしい。ガリンンド大使からの提案で「インカ道の奥地に隠棲する花村さんに会う」という目的に何時の間にかすり替えられていた。しかも謎の花村氏についての情報は全くない。日本人・男だけである。しかし各々自分の係の仕事が忙しいので、みんなもあえて彼については触れなかった。なんだか良く分からぬまま彼に会いに行く事になってしまったのだ。

日本人隊の中で本格的な登山経験のある者は少ない。かく言う私も例外ではない。出発前に高山病対策として登った富士山が初体験。今回のインカトレッキングも「女性が少ないとテレビ映りが悪い」という大使のわけの分からん理由で嫌々駆り出されたのだ。

初めての登山、しかも日本一に登ってしまった私は、まんまと高山病にやられた。女で1人余裕で登頂し「ちよろいじやん、富士山」などとほざいたのがいけなかった。就寝になって、寒さと頭痛が襲ってきた。ほとんど寝られず、一晩中心の中で山の神々に謝りたおしていた。しかもこの合宿で、かつてはマシーン片平と詠われてきた隊長も、唇を紫色に染めながら頭痛と戦っていた。高山病と経験不足。インカトレッキングへの不安要素は大きい。大きな爆弾を抱えたまま本番となつた。

ラパスから車で2時間ほどの距離にスタート地点がある。ここが今回の出発地点だ。あと数百メートルで頂上という場所で車から降ろされ、記念撮影をした後トレッキング開始。日本人9名、ボリビアー10名という大所帯で登る。大使は記念撮影というおいしい所のみをもって帰ってしまった。頂上までの数百メートルが酸素欠乏及び高山病による頭痛の為、何千キロにも感じられる。大昔に十キロ走った時よりも辛い。飘々と歩いていく佐藤さんまで、理由もなく憎く思えてくる。ウォークマンから流れてくる宇多田ヒカルも、今の私にはなんの慰めにもならない。

やつとの思いで登頂。目の前に日本では見る事のできない雄大な景色が広がる。頂上は4800メートル。登山2回目にして富士山を余裕で越えてしまった。草木1本生えていない。見事なまでの快晴と素晴らしいパノラマの中、ひたすら写真撮影。開始から30分にも関わらず既に満身創痍であった。

あとは下るのみ。しかし下っても下っても高山病。現地で購入したリーサルウェポン「ソロッチ」は鬼畜・福栄により最早かけらも残されていない。かつての高山病仲間であった片平・福栄はめでたくメンバー脱退。無事卒業し、にこやかに歩いている。「南米デビューめ」と臥嘗薪胆の思いを胸に抱きひたすら足を進める。途中高山動物リヤマと出会う。やつらはお尻をブリブリさせ、排泄物を撒き散らしながら嵐のように走り去っていった。とてもスカした顔をしていた彼らのチーズとハムが昼食に出た。美味。

テントを張るとともに寝込んだ私に対し「スープ飲む?」「ソロッチ貰ってきた」等皆恐いほど優し

い。これも一種の高山病だろうか？と疑いたくなる程である。しかし本多がテントへ入ってくるなり、異臭騒ぎが。いくらソロッチをくれた恩人とはいえ、納豆臭い足にはさすがに刺し殺したくなる。寒さ・高山病・本多。まさに三重苦である。

問題の一日目を越えると後は非常に楽勝であった。丈の低い草から木へ、湧き水から川へと下るにつれて景色の変化も楽しめる。2日目の夜の夜景は見事だった。空一面の星とクリスマスツリーのように点滅する多数の螢が、幻想的な空間を演出していた。南十字星の下で真っ裸でになって岩の上で踊り狂う熊原の尻が、今でも忘れられない。

今回のトレッキングの目的である花村氏の家に近づくにつれ、私たちは佐藤さんから花村氏についてのレクチャーをうけた。聞けば聞くほど謎が深まる。一応みんなでない知恵を絞って質問事項をまとめておいた。最大の謎は花村氏にとってのアイデンティティー。あと数十分で到着という時になって初めて、花村氏に私たちの来訪が伝えられていないという事を知った。20年近く山を下りていかないという花村氏。「もしかしたら既に……」という不安を抱えたまま彼のもとへといく。

彼はやはり謎の人だった。実際お会いしてみてもそう思う。夜ビール持参で話を伺いにいったが、そこでもやはり謎だらけ。隊長・片平の健闘も虚しく、一番聞きたいことが聞き出せない。あんなに孤軍奮闘な片平を見ることはもうないであろう。「花村さんの好きなことばはなんですか？」「スペイン語」「座右の銘は？」「どんなメイ？」そんな彼の前に私たちは、ただただ無力だった。

後日私たちが歩いたルートが観光地化するかもしれないという話を聞いた。できれば観光地化などせずに、あのままの自然を残して欲しいと思う。植生の変化や気候の変化など、同じ山でも高度によって全く趣がことなっていた。ガリンド大使の気まぐれにより、嫌々行くことになったインカトレッキングだが、4日間という短い期間の割には非常に内容の濃いもので、その後行ったどんな観光地よりも一番行って良かったと思える。それはボリビアの人と自然の素朴さを体感できたからではないだろうか。それは私の中であんなに苦しんだ高山病の辛さを打ち消してしまった。現代の日本が何処かで失った時間の流れを、あの場所では確かに感じることができた。

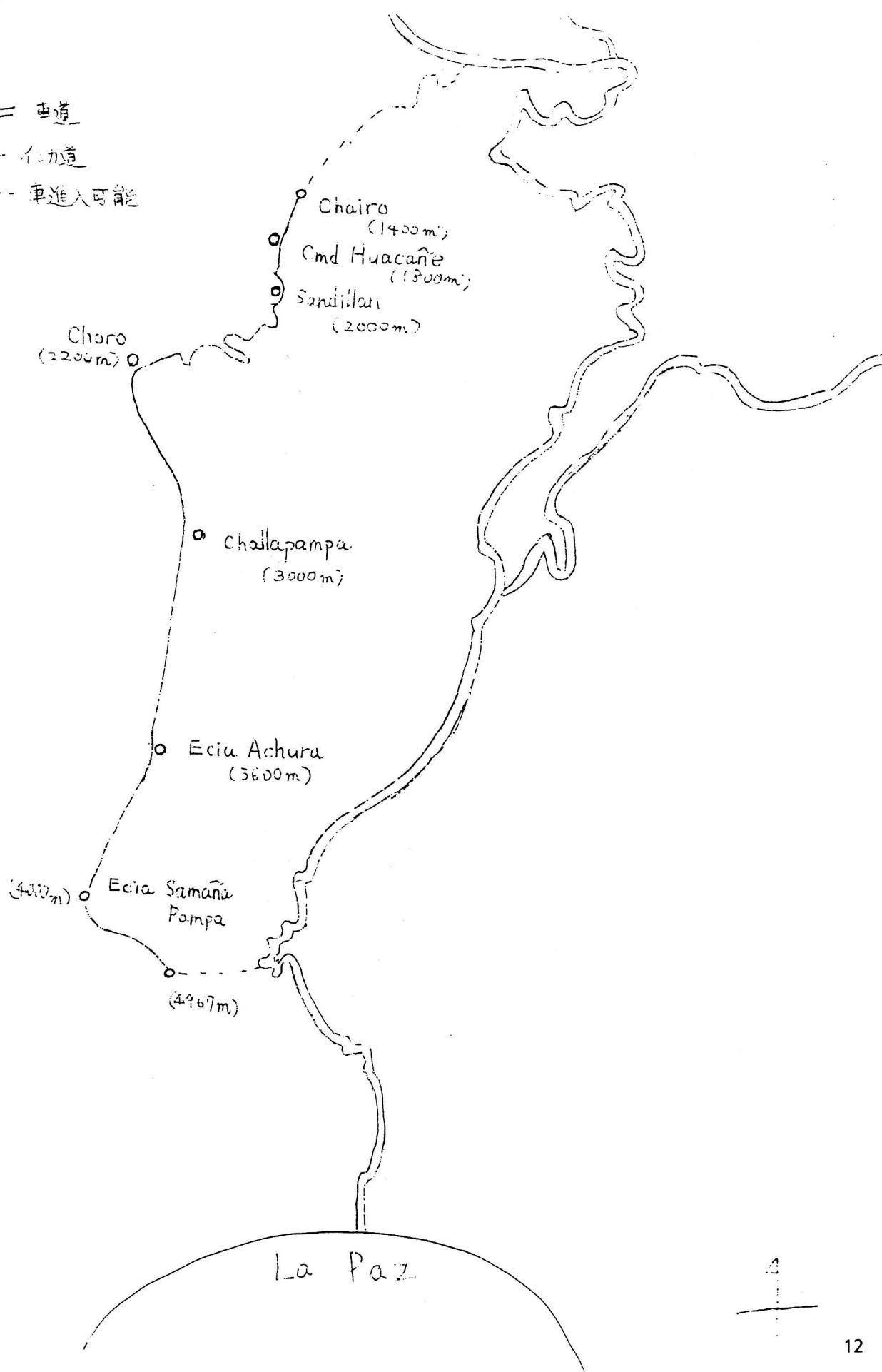


▲トレッキング中に出会ったリヤマ

— 車道

— 人力道

- - - 車進入可能



## マードレ・デ・ディオス川下り

目的：100 年前の移民の足跡を辿りつつ、川筋に住む日系の方々と交流する。また、アマゾン川の支流にあたるこの川で、大自然に触れる。

装備：駐日ボリビア大使同行などの諸事情により、軍隊のエンジン付きの船が伴走してくれた。水上で使わない荷物は全て軍の船の上に置き、軽装で今回の計画に望んだ。當時携帯していたものと、陸上で使ったものと分けて記しておきたい。

携帯品：GPS・トランシーバー・レスキューロープ・ライフジャケット・コンパス・ホイッスル・防水パック・メガネ紐・リバーナイフ・虫除けスプレー・かゆみどめ・医療パック・カメラ・モスキートネット・ライター・タオル・トイレットペーパー・フィールドノート・ポリタン・地図

陸上装備：テント・テントマット・火器・ザック・カヌーリペアセット・蚊帳・浄水機・食糧・水

メンバー：メンバー表参照

行程記録：日程表に概略が記されているので参考していただきたい。8月14日に出発予定だったのだが、スールという南極から吹いてくる強風により、翌日の15日に出発が延期となる。このスールは、乾季の間に数度吹くのだそうが、今年いちばんのスールにあたってしまう。強風の上に、気温も下がる。それまでは半袖で汗をかいていたが、スールが吹いている間、夜などはフリースを出さないと耐えられないくらいだった。緯度的には赤道に近いというのに南極の風がここまでやってくるとは、正直驚きであった。翌15日には風も多少おさまり出発となるが、進行方向から吹く逆風を受け、また風を受け波立つ水面に翻弄されつつカヌーを漕ぐ。カヌーはアーリー社のカナディアンタイプ。装備の人間に話を聞くと、安定性と積載量、折りたためるという利便性を買ったという。確かに喫水が深く、非常に安定性のよいカヌーではあったが、推進力に少々欠け、逆風の煽りを受け初日から難渋した。だが、日をおうにつれ風は治まり、隊自体がペースをつかみ出すと平均時速8kmをマークする。当初の計画では、1日で6時間行動の30kmを目標にしていた。ようするに平均時速5kmで計算していくことになる。概して、机上の計算と現場の数字は差が出てくるものである。我々は30kmを基準とするのではなく、6時間行動を基準にして行動することに決め、ゴールのリベルタルタを目指すことにした。ただ、こうなると単純計算で一日48km進むことになるが、現実は6時間の中にレストを挟みながら動いたので、1日に約40kmペースで行動した。

翌日の16日の夕方にはペルーとボリビアの国境の町、ヒースにつく。ここでは軍の施設

を使わせてもらい、19日まで滞在する。この間に支流探査を行い、野鳥、ヘビ、ワニの姿などを見る。支流の上流域にエコボリビアという宿泊施設があった。最近完成したそうで、ホテルとして建設したことだった。ただ、場所的にはヒースからエンジン付の小型ボートで遡上すること約4時間かかる。果たしてそのような辺鄙な所に人が来るものかと疑問に思ったが、ゆくゆくはヘリポートを作り高級ホテルとして売り出すらしい。私たちには幸運なことにそのホテルの記念すべき宿泊客第一号だったらしく、非常に歓迎してもらった。確かに「高級ホテルに」と言うだけのことであり、建物の作り、サービス、食事どれをとっても自然と融合した良い雰囲気を醸し出していた。建物は木造の高床式。食事は新鮮な鶏肉、卵をベースにしたもの。照明も必要以上に明るくなく、間接照明を主にして明かりをとるという感じであった。ただ、あの立地条件を選んだことについてはいまだに謎であるが。

19日にヒースを出発し、18km 下流のチーベというところに着く。ここでは、サンファン移住地の方々が、陸路 3000km を車でとばし応援に駆けつけてくださる。そこでは盛大なバーベキューが催され、私たちの労をねぎらっていただいた。頭が下がる思いである。サンファンの方々はその後も魚釣りをしながら、私たちと同じ位のペースでリベラルタまで下ったらしい。というのもテント場が同じになつたことがなかつたため、水上で姿を拝見することはあっても、時間の流れが緩慢になる夜のひとときを共に過ごせなかつたのである。ただ、アマゾン川流域に生息する淡水魚を刺身にし、醤油とワサビを差し入れていただいたときの喜びは、隊員一同、忘れないものとなつた。また日本の淡水魚のイメージというと泥臭さを払拭できないが、ご馳走していただいた刺身は、川魚特有の臭みといふものは、ほとんど感じられなかつた。ちなみに川自体は、お世辞にも綺麗だとは言えない。というよりも日本のどこの川よりも見た目は汚いであろう。透明度はほとんどなく、泥に茶色く濁り、川筋の街からの排水は下水処理されないまま垂れ流されている。少々汚い話になって恐縮だが、川をカヌーで下っていると川面に盛りがつた泡の固まりを無数に見た。現地で働く海軍の少年に「あれは、なんだ」と言うようなことを聞いてみたところ、意味ありげな含み笑いを浮かべながら「トイレから来た」というではないか。要するに米が異なつたもの。有り体にいうと糞なのである。しかし、だからといって魚が不味くなるわけでもなく、差し入れてくださつた刺し身を、私たちは殺氣交じりの和気藹々とした雰囲気の中、先を争つて箸を伸ばした。また、私たちは、変わり果てた大便の残骸を横目でやり過ごしながら、無邪気に川遊びに興じたものである。実際、大汗をかいて一日の行程を終えるとそのような状態の川でも身を浸し、涼をとりたくなる。また石鹼をつけて体を洗えば、さっぱりして気持ちよく熟睡できたものだ。日本のどぶ川でそのようなことをすれば、狂氣の沙汰なのだろうが、人間の適応力と自然の雄大さは、得も言われぬ魔力を持つのである。ただ、生活排水の問題からもわかるように、現地の人々は環境問題というもののへの意識は希薄なようである。今まで環境を破壊しながら経済を発展させ、暮らしの豊かさを追求してきた我々が、余裕が出できたからと言って、これから発展しようという

国に環境問題のモラルを問うというのも、身勝手な話ではあると思うが、それでも自然の魔力は無限ではないということを知って欲しいと感じたのも事実である。

8月20日チベ発。ここで室が体調不良のため、検査を受けに近くの街まで行くことになる。近くといつても検査ができるだけの設備を持つ病院がある街へ行くにもチベから陸路で4時間ほどかかる。ここでも国本教授はじめ、日系人、また現地の方々には格別のが配慮をたまわり、お礼の言葉もない。幸い室の体には、脱隊などという、差し迫った異常があるわけでもなく、翌21日の夜には隊に戻ることができた。

8月25日、中間地点でもあり昔(現在でもディオス川の川筋では有数の規模の街である)水上交通の要所ともなっていたセナに到着する。ここでは街を挙げて歓迎をしてもらう。晩餐会で小学校の子ども達の踊りや、歌を披露していただく。この旅を通して言えることなのだが、地球の反対側の島国から来た一介の学生達に、日系人はもちろん現地の方々まで非常に歓迎していただいた。一同感激すると共に「ハボネス」という民族をここまで許容してもらえたというのは、現在の日本政府の支援、努力もさることながら100年間の年月の中で、日系人の方々がボリビアで積み上げてきた「ハボネス」または「ニッケイ」という信頼の上に成り立っているような気がした。

8月26日セナを出発するが、今回の行程中を通して体調の芳しくなかった高橋が、カヌーの上で倒れ、水の中に落ちてしまうという事件が起こる。幸いライフジャケットをしっかりと身につけていたらしく、大事には至らなかったのだが、体力の限界と感染症の疑いのため、一足先にゴールであるリベラルタで療養することになる。この後彼女は、検査や治療のためほとんど隊と行動を別にしてしまう。ただ、命に関わるようなことが無く、不幸中の幸いだったと言えよう。彼女だけではなくセナをすぎた辺りから、同時に疲労の色が濃くなってくる。気温にして30度オーバー。川の上には日差しを遮るものがないので体感気温は40度ちかくまであったのではないだろうか。その中のカヌーの操船である。否が応でも疲れは蓄積されていく。もちろん我々もある程度の疲労への自覚があったので、日中最もあつい正午前後を昼休みに当て、熱射病、日射病の予防対策をしいた。それでも亜熱帯の太陽は私たちの体力を削っていった。28日に高橋に引き続き、大矢がカヌーの上でダウンしてしまう。彼女は熱射病だったらしい。付き添っていてくれていたイボ医師は、高橋と同様に大事をとて彼女をリベラルタに戻したがったが、ゴールまで対した距離ではないのと、本人の強固な意志のため彼女は、そのまま行動を共にすることになる。

そして、8月31日。ペルーのプエルト・マルドナードを出てから17日目ゴールのリベラルタに無事着くことができる。リベラルタではゴール地点の川縁に人壁ができ、花火があがり、盛大に歓迎式典を催してくれた。その多くに日系人の方が参加してくださったのも我々にとっては非常に嬉しいことであった。皆、顔には達成感と心地よい疲労が見られ、盛大な歓迎式典を前にして、感動がわき上がってきたのを、今でもありありと思い浮かべることができる。

あのとき口の中でアドレナリンの味が、した。

四方山話：川下りにおける印象深い出来事の1つに、野生のフラミンゴを見ることができたということが挙げられるであろう。ジャングルといえども乾期とすることが影響してか、風景はさほど色合い豊かなものではなかった。その中でフラミンゴのピンクというものは違和感を禁じ得ないほど艶やかだった。実際ある隊員の行動記録の中には、フラミンゴの感想がこのようにつづられている。『自然の中から何故あのような色が生まれてくるのであろうか』。その光景に居合わせた人間からすると非常に的確な表現のような気がする。それほど自然の中のフラミンゴの桃色は鮮やかに私たちの目に映った。

生物といえば、忘れてはいけない話が一つある。魚の話だ。私たちは、現地に行くまで、アマゾン流域にはピラニアがわんさかいて、水に落ちようものなら手足の一本は覚悟しなければと思っていた。しかし、実際のところピラニアはあまり人などの大型動物を襲うことはないそうである。なぜか。エサが豊富なのである。別段大型の陸上生物が誤って水に落ちてくるのを待たなくとも、十分にエサにありつけるのだ。私たちも水浴び、水遊びの類はすべて聖母川、マードレ・デ・ディオス川で行ったものの、誰一人として、手足が無くなつたものはいない。ただ、凶暴な魚はいなかつたが、非常にユーモアのある魚が多くいて、私たちを苦笑させてくれた。私たちにとってディオス川の水は、ほとんど透明度がないように見えるが水生生物にとっては生活の場。水が濁っていても見えるものは見えるらしい。私たちが水にはいるとき、男性諸君は、上半身裸になりオス河童化する。すると好奇心おおせいな彼らはどうも私たちの乳首が気になるらしい。エサに見えるのかどうか知らないが、遠慮なく食いついてくる。幸い彼らはかわいい口と歯しか持っていないようで、乳首の先が紛失するということはなかつたが、これはかなり度肝を抜かれる。大抵一度水の中にはいると、どこかで「わあ」だの「ひやあ」だの「おふん」などの怪しい奇声が飛び交うことになる。しかしあるときひとりわ大きい奇声が一同の耳を襲つた。一瞬、乳首を遺失物係に探しに行かなくてはという思いが頭をよぎる。次の瞬間「両方いっぺんにやられた」。なんというニヒリズム。なんという無邪気さ。一同腹を抱えて笑つた。ただ今思うとピラニアが好奇心のあまりない魚だったことに胸を撫で下ろす次第である。



▲水浴び

## アマゾンの「力」

本多 肇

川下りにおいて。とにもかくにも、皆が一番悩み、イラつき、嫌だったのは、蚊である。帰ってきて、いろいろな人からの質問で、「一番苦しかったのは何?」と聞かれ、全員一致で蚊を挙げる。全員同じこと言っても面白くないだろうと思い、何か他のことを言おうと考えるも、どうしても一言蚊のことを言い添えておきたくなる。川下りにおいての最大の難敵、蚊について述べてみよう。

もっと正確に言うと、蚊ではなく、ブヨである。アマゾンにいるのは、日本の蚊よりももっと大きくてごついやつ、と想像されそうだが、私たちが出会ったものは、体長1.5mm程の、ブヨといったほうがいいやつであった。日本のヤブ蚊に似たものもいたが、川の後半の方に登場し、不快感においてはそのブヨに劣る。もちろん川においては全ての蚊が不快だったが、ここではとくにひどく、特徴的なそのブヨを、以下「力」とし、日本のヤブ蚊に似たものを「蚊」として、具体的に日本の蚊と何が違う、どう、より嫌だったのかを細かに分析してみよう。

まず何よりも、「力」の数の多さである。肌が露出した部分はことごとく刺され、治るのを待たず次々に刺される。用足し時に露出すればきちんとそこも刺される。ちなみに、尻を刺されると、座ってカヌーを漕ぐためにこすれて、また川の上だから濡れやすいということであやけて、どうにも嫌な感じである。出発前から、ある程度予想はしていたことだった。「アマゾンは蚊が多い。虫よけスプレー、蚊取り線香、虫さされ薬、蚊帳などたくさん用意しよう。」私自身は、個人装備で虫よけスプレーを3本用意した。しかし、現地では、あまりの蚊の多さに量を使い、残り少なくなったスプレーを惜しみながらも、蚊憎さに僕約を忘れる、というはめにおちいった。

そして、「蚊」と比べて「力」への嫌悪性をより高くしているのが、その喰い跡の様である。「蚊」に刺されると、人により違うが、まあそこそこ直径1.5mm程に赤く丸く腫れ、かゆくなる。「力」に刺されると、刺された所は、小さい、ちょうど「力」と同じ位の、赤く、固い点になる。「赤」色は「蚊」のときの赤く血色づく赤ではなく、もっと生な、血だまりといったような、血がボツンとたまって、それを皮フごしに見るといった感じである。実際、その跡が治るとき、血まめのように赤紫になって消えていく。そして、その跡は「蚊」よりもう少しかゆい。(気がする。) それに加え、私の見解では、たぶん川下りで砂浜にテントを張らざるを得ないことによって、どうしても身体や衣服に砂がつくことが、かゆみ、というよりも「不快感」を1, 2倍くらい増すと思う。「力」の跡はそんなに腫れはしない。しかしそれも、一点集中的に腫れないというだけのことで、数刺されて、腕回り、首回りが少し太くなっている隊員もいた。跡が消えてなくなるまでの期間だが、旅の疲れ、食事などの慣れない生活習慣、大量の「力」の毒に対する体の免疫機能の低下など、諸々の副

次の要素の存在もあったが、帰国して2ヶ月が経とうとする今も消えないで残っている隊員がいる。

さらに「力」は、「蚊」よりも素早い。その膨大な数と、残忍な喰い跡に怒り、イラつき、目前のわが腕に巢食う「力」をひつ潰そうとも、そのまま感情に任せた気配ミエミエの荒い素振りではヤツらを捕らえられない。内心怒りに燃えながらも、冷静に静まり、何も気に留めたフリを見せず、周到に、位置、角度、タイミングを見定め、正確にかつ素早く腕を振ることでのみ、アッシさせることができる。

不思議だったのは、これ程「力」に悩まされる川下りの間、私たち日本人は「力」に刺されないよういつも暑いなか長袖を着用していたのに、軍のボリビアーノたちはそんな私たちの横で、平気でTシャツ、短パンで過ごしていたことである。彼らは、刺されていることは刺されているのだが、私たちに比べて圧倒的に数が少ない。「力」がとまってもさして気にする風でもなく、時折手をパタパタやる程度である。カタコトのスペイン語で聞いたところによると、この地域にずっといるから、子供のときからいるからだ、ということらしい。もう免疫ができあがっているということなのであろう。

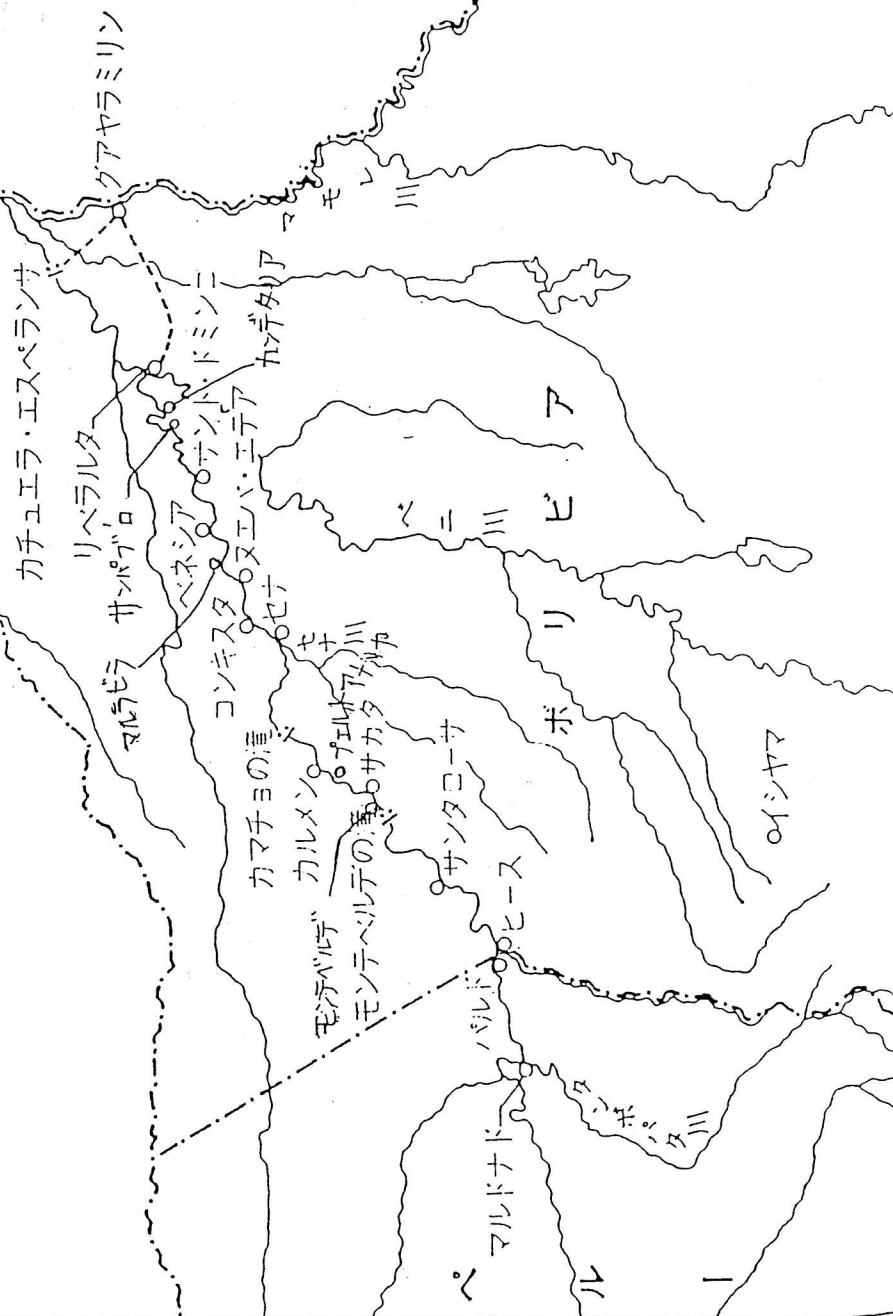
快適そうなボリビアーノを羨みながら、たぶん皆が一回は志したのが、「もう気にしないことにする」という、いわゆる無我の境地である。誰しも、かゆかったり痛かったりどうにも気になっていた所が、何か他のこと、例えばスポーツなどに夢中になっている時はぜんぜん気にならなくなっていたという経験があるだろう。後になって思い出して、ああそういういえばさっきは何ともなかったなあと気付く。それと同じような境地に達するべく、半分意識的に「力」に関する、かゆみやらイラだちやらを頭の中から追い払うわけである。「心頭滅却すれば…」である。

まあ、そんなことで平気になるんだったら苦労しない。結果はいうまでもないが、むしろ気にしないのをいいことに余計刺されたりする。「…それど「力」はまだ痒し」。はかなく挫折した後も、絶え間なく「力」はやってくる。私たちの思惑、どうにか耐えていこうという努力、ああその健気さ、などには、全く、全く無関心に無関係に、ただ「力」としての営みを続けていくだけの「力」。それは、「力」よりもむしろ大自然の営みというヤツである。大いなる大自然。人間の思惑なんぞ大自然のちからの前にはなにほどのものでもない。自然のちからって偉大だよなあ。

アマゾンの「力」は、偉大なアマゾンの「力」であった。<sup>ちから</sup>

## 聖母の川下流

### ブ ラ ジ ル

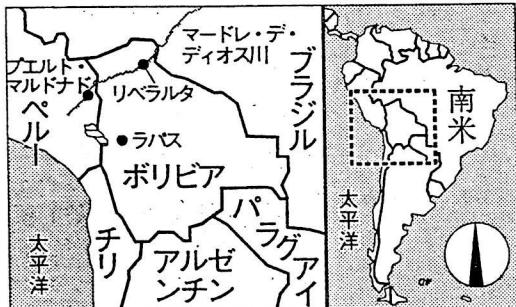


100km

0

7/29夕刊4版

# ボリビア移住100年記念

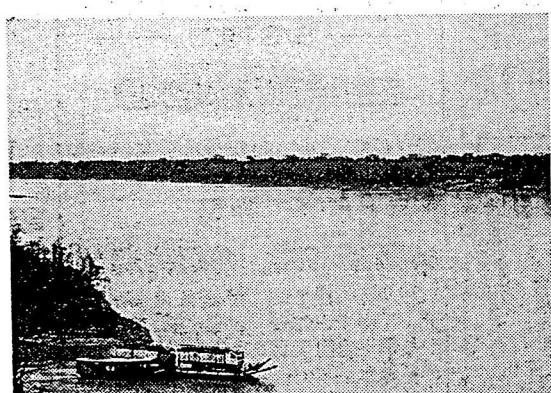


## 横浜市大生と 駐日大使ら アマゾン600キロ川下り

南米ボリビアに日本人が移住して今年で100年になるのを記念して、横浜市立大学探検部と在日ボリビア大使館の合同隊が8月から9月にかけ、初期の移民たちの足跡を追体験する計画を立てている。ペルー側からアンデス山脈を越えて川を下って天然ゴムが自生するアマゾンの密林に至る「ペルーアマゾン」を呼ばれるルート。それをなぞりアマゾン川の源流の一つ、マードレ・デ・ディオス(聖母)川約600キロを手こぎカヌーで約1ヶ月かけて下る。出発を控え、学生たちは「川下りを通じ、新天地を目指した移民の魂を体感し、現地の日系人と交流を深めたい」と最終的な準備に余念がない。

【大概 英二】

メンバーは、日本側が隊長の片吉秀さん(20)と同大商学部3年生の探検部員9人と、中央大生2人、拓殖大生1人の計12人(うち女子学生6人)。スポンサー企業の社員2人も同行する。ボリビア側は、エウドーロ・ガリンド駆日大使(56)をはじめ、医師、軍人ら10人が参加する。一行は8月2日に成田を出発し、同14日にペルーのペルト・マルドナドから川下りを開始する。国境を越えてボリビアに入り、9月9日にはペルーに到着する予定。途中で、戦後長の片平吉秀さん(20)と同大商学部3年生の探検部員9人と、中央大生2人、拓殖大生1人の計12人(うち女子学生6人)。スポンサー企業の社員2人も同行する。ボリビア側は、エウドーロ・ガリンド駆日大使(56)をはじめ、医師、軍人ら10人が参加する。一行は8月2日に成田を出発し、同14日にペルーのペルト・マルドナドから川下りを開始する。国境を越えてボリビアに入り、9月9日にはペルーに到着する予定。途中で、戦後



横浜市大探検部と在日ボリビア大使館の合同隊が川下りを計画しているマードレ・デ・ディオス川

# 初期移民の「魂」を追跡

南米では1997年にペルーで早稲田大学の探検部員2人が殺害される事件があり、それがきっかけで、横浜市立大の探検部OBが気づき、両国の合同隊を組織することになった。

ビアに入った。その後、ペルーの農園での過酷な労働を逃れてゴム景気に沸くアマゾンの密林を目指す日本人が相次いだ。戦後は2ヵ月の片平さんは昨夏、現地所の日本人移住地が建設され、現在約6700人の日本人社会が築かれている。今回の計画は、ガリンド

大使が移民100周年記念の川下りを現地紙で呼び掛けたのがきっかけ。横浜市立大の探検部OBが気づき、両国の合同隊を組織することになった。

ビアに入った。その後、ペルーの農園での過酷な労働を逃れてゴム景気に沸くアマゾンの密林を目指す日本人が相次いだ。戦後は2ヵ月の片平さんは昨夏、現地所の日本人移住地が建設され、現在約6700人の日本人社会が築かれている。今回の計画は、ガリンド

大使が移民100周年記念の川下りを現地紙で呼び掛けたのがきっかけ。横浜市立大の探検部OBが気づき、両国の合同隊を組織することになった。

アマゾン川源流マードレ・デ・ディオス川を約600キロ下り、ゴールのリベラルタの港に入る  
日本・ボリビア合同カヌー隊=ボリビア北部リベラルタで、佐藤泰則写す



## アマゾンに足跡たどり カヌーで600キロ

### ボリビア移民100年



南米ボリビアに日本人が移住して今年で100年になるのを記念し、アマゾン川源流のマードレ・デ・ディオス川を手こぎカヌーで下っていた横浜市立大検査部と在日ボリビア大使館などの合同隊(12艇24人)がこのほど、ゴールとなるボリビア北部のリベラルタに到着し、現地の日系人らの熱烈な歓迎を受けた。  
(社会面に連載企画「100年の夢」)

先月15日にペルトマルドナドを出発。テント生活をしながら17日間かけて約600キロを下った。今世紀初頭、コム寮年にひかれたペルーの日本人移民がいかだでボリビアに下ったルートをたどった。3、4世の時代になった今もリベラルタの人口の1割は日系人といわれる。川下りの日本側リーダー、片平吉秀さんは「私たちちは地図で現地を知ることができましたが、100年前の日本人はどれだけ不安な気持ちで川を下ったことでしょう」と話している。

【大槻英二】





# 100年の歩み

●●300●●

## ボリビア日本人移民を訪ねて



### ●●日本人村建設●●

南半球特有の暖かな北風がオレンジ色のティコの花を揺らし、乾期のあと短い春の訪れを感じる。ボリビア第2の都市サンタクルスの北西約130キロに広がる「サンファン日本人移住地」。カトリック教会のある中心部を歩くと「こんじは」と日本語で声が掛かる。昭和30年代の下町の人情味が、異国町並みに溶け込んでいるようだ。

「物忘れが激しくなりました。が、あのころのことは映画のシンのように覚えていています」。武田健司さん(75)は今年、ボリビア日本人移住100周年記念祭の委員長を務める。この地に渡ったのは44年前。ぼろ苦い記憶が残る。

「外務省の助言もあり、行き先はボリビアのサンタクルス郊外(サンファン地区)に決まる。責任者の西川利通氏(82年に74歳で死亡)の後を追い、武田さんは単身、横浜から船に乗った。55年3月、現地に骨を埋める覚悟だった。船内に理解を示してくれた父の証言を、船内で受け

東京・銀座の清涼飲料会社に武田さんが迎えられたのは1953年。パンコク支店の開設準備のためにだ。翌年、経営がサンタクルスの支店で開設され、支店開設はどんどん拡大する。会社を辞めていった上司たちには、南米での砂糖作りを計画した。「製糖機械を送り、原料となる砂糖きび栽培のための日本人移住地を建設する」。武田さんは説かれた。大学時代にスペイン語を学び、進駐軍で通訳をした経験を賣られた。

「このままサラリーマンを続けるより自分の力を試したいと、いう気持ちはありました。食べるぐらい、なんとかなるだろう」と悩んだ末に会社を辞めた。

「移民事業が国策だった時代、外務省の助言もあり、行き先はボリビアのサンタクルス郊外(サンファン地区)に決まる。責任者の西川利通氏(82年に74歳で死亡)の後を追い、武田さんは単身、横浜から船に乗った。55年3月、現地に骨を埋める覚悟だった。船内に理解を示してくれた父の証言を、船内で受け

# 脱サラして力試し

原始林を開拓、「幸せな仕事できた」



募集した移民の第1陣、14家族88人が到着したのは同じ年の7月。責任者の名を取つて「西川試験移民」(第0次移民)と呼ばれた。しかし、受け入れ態勢の不備から移住者との確執を生み、事業は空中分解。武田さんはサンファンを去らざるを得なかつた。

57年の第一次計画移民(25家族159人)から92年の第53次まで、サンファンには3002家族1684人が入植した。道路が未整備だった当初は、ブラジルやアルゼンチンへの再移住者が続出した。今は244家族790人が暮らす。半数近くが長崎県出身者(鹿児島・大豆義興、柑橘類の複合経営で、鶏卵はバスの消費量の6割以上のシェアを誇る)。

病院や学校も整備された移住地で武田さんは感慨にあふれる。「原始林を開拓するような仕事を21世紀にはないでしよう。それをお手伝いできることは幸せに思います。あのころは目の前の課題に対応するだけで精いっぱい。ずっと背伸びして生きていきました」。100周年の記念行事が一段落すれば、サンタクルス郊外に借りたハウスでサン

テイコの花(左)が咲き誇るサンファン移住地中心部の入り口=佐藤泰則写す。中内は武田健司さん

【サンファン移住地で大根英】  
=つづけ

た。

間の移住協定が締結されるところに引き継がれた。野菜作りを始めた武田さんは、海外協会連合会(現国際協力事業団)の現地職員として採用され、その後10年間、再び移住地建設にかかることになる。

57年の第一次計画移民(25家

族159人)から92年の第53次まで、サンファンには3002家

族1684人が入植した。道路が未整備だった当初は、ブラジ

ルやアルゼンチンへの再移住者

が続出した。今は244家族790人が暮らす。半数近くが長

崎県出身者(鹿児島・大豆義興、

柑橘類の複合経営で、鶏卵はバスの消費量の6割以上のシェアを誇る)。

病院や学校も整備された移住

地で武田さんは感慨にあふれる。

「原始林を開拓するような仕事

は21世紀にはないでしよう。そ

れをお手伝いできることは幸せ

に思います。あのころは目の前

の課題に対応するだけで精いっ

ぱい。ずっと背伸びして生きてい

きました」。100周年の記念

行事が一段落すれば、サンタク

ルス郊外に借りたハウスでサン

栽培に没頭するつもりだ。



99.9.16.对

# 100年の夢

ボリビア日本人移民を訪ねて

995



会が設立されたゆかりの地社会に溶け込んで生きながらの移民の子孫と一緒に移住者が共に花輪げ、先達の靈を慰めた。

地。現  
が成長した。木の空耳が現  
象に残っている。大きな家  
で、クレープフルーツを生  
持った父親の姿。「ボリビ  
行けば、大きな屋敷に住ん  
果物をたくさん食べられる

日本人の移住100周年を記念した慰靈祭が今月1日、ボリビア北部のリベラルタで行われ

母親に連れられて郷里の沖縄島  
・宮古島を離れたのは8歳の時  
だった。一足先に渡航した父親

「教育は重要だと、根間玄真さんを得た。日本人移民から『ぐせのよう』に言つて、日本系ボリビア人へ、意識も変わつた。」

# 進む世代交代

「心」を継承 社会に貢献



日本から来た学生カヌー隊を出迎える日系4世の若者たち。この日のために日系人会青年部を発足させたリベラルタで、佐藤泰則写す

「教育は重要だ」と、根間玄真さんを得た。日本人移民から日本へ、意識も変わった。



91年、サンタクルズ市中央日本人会の会長に選ばれた。戦後移民が再開されて37年が過ぎていた。世代交代が進み、戦後移民の子供たちもボリビア社会に根を下す中で、日本人会はかつてのようなく心力を失っていた。会を活性化するため、日本語のみで開いていた総会にスペイン語を併用する

□ぐせのようと言つて、いた父親だったが、この時ばかりは学業を中心とするを得なかつた。それを学校へ伝えに行く。担任のスペイン人教師は「学費は免除するから、学校に戻りなさい」と言ってくれた。あの先生の言がなかったらその後、大学へ進むことも、弁護士になることもなかつたと思う。弁護士資格を取る時、日本国籍を捨て、ボリビアの国籍

などを実現を進めた。それでも2世、3世たちは離れていた。  
「サンフアン・オキナワ町移住地は、移住協定に基づいて日本政府の支援を受けてきました。しかし、2世、3世の時代になると、日本人であるというだけでは支援を受けにくくなる。その時のために、受け皿となる日系社会の窓口を「本化しておきたい」。法律家らしく、根間さんの心配は消えな。

移住100周年の記念行事の狙いは、日系社会そのものの組織強化にある。たまたま戦前の1世が残した土地のあたりベラルタには今年、日本の援助で新しい日系人会館が建ち、日本語教室が再開された。日本への出稼ぎや、日系人としてのアーティティイーの再認識につながっている。

「日本人の『誠実さ』／＼勤勉さ／＼ボリシア社会に貢献することができる。この国にもへねねらか／＼いろいろな面があります。二つの祖国のいい面を取り入れていけばいい」。根間さんは指摘する。

そんなん／＼日本人の心／＼を継承する「日系国際校」を開くのが夢だ。

【サンタクルスで大観 英二】

一  
九



豊かな森に囲まれて親子（右が母、左の2匹は息子）でのんびりと毛づくろいするオマキザル＝コロンビアのマカレナ熱帯雨林で



## マカレナの森で

● 南米アマゾン日誌

多くの原生林で、多様性に富む生態系がみられるところから「陸のガラパゴス島」と呼ばれる。この森で24年間、新世界（南北）サルの研究を続ける宮城教育大の伊沢紀生教授（59）は、『霊長類学』とともに、大自然に生きる動物植物について語った。

南米コロンビア中央部のマカレナ熱帯雨林。アンデス山脈の東、オリノコ、アマゾン両水系の源流域に広がる30

銳い日差しが照りつけたと思ったら、途端にスコールがたなきつける。雨期のジャングルは天気で激変する。

南米コロンビア中央部のマカレナ熱帯雨林。「チャムサギャンブ」で迎えた初めての朝、東側

木々が突然、揺れた。

餌付けしているオマキザルの一群だ。伊沢教授が「ホウ、ホウ」と呼び掛けると、サルたちも樹上

# 会社の結婚



？

ガサ、ガサッ。

生まれた時からクラッカの味を知っている子

が、この群れに入つて間もなく彼は、つらい野生のものに手が伸びる。2回目も、迷った末にコヤシを選ぶ。3回目、今度はコヤシとクラッカの両方を取つた。4回目になって、クラッカだけをむさぼり食べた。

カの味を知っている子ザルたちは、最初からクラッカだけを両手でわらっかに、ちょっとしづかに、ちょっと

さと小走りに戻つて、さと台の下に回り、おぼれを狙う子ザルも

まだもとに手が伸びる。2回目も、迷った末にコヤシを選ぶ。3回目、今度はコヤシとクラッカの両方を取つた。4回目になって、クラッカだけをむさぼり食べただけをむさぼり食べた。

体識別では、群れは16匹。メモと照合しながら出席を取ると、10匹が確認できた。

「ナンバー」と書いてえさ場にクラッカ、ココヤシ、バナナを並べる。中央の木に頭取つたオスのナンバー1、セサールが下りてきて「ココヤシを取つた。いつもセサ

ーのを乗せて食べられるかも群れを支配しているわけじやありません。ほかのサルたちも、だれに付いていけば、おいしいもの

を考えて行動しているのです」と伊沢教授。日本本の会社社会の縮図を見つめるようだ。

文 大槻英二  
写真 佐藤義則



● 南米アマゾン日誌

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

（59）

## 交通手段はカヌーだけ

アマンの源流域、マカラ  
レナ熱帯雨林にある宣教  
音大の伊那松教授(33)の  
調査拠点「チャムサキャン  
フ」。秘境だけあって、「サ  
ルの楽園」までの道のりは  
遠い。

標高3600mのカロン  
ヒテの首都サンタ・トボ  
コタカの「ロング」機を2  
機乗り継ぎ、マカラ市で  
草原の滑走路に。二日酔い  
のめまめ山病の症状から  
解放され、熱帯特有の湿氣  
に迎えられた。ここから、  
ひたすら進む。

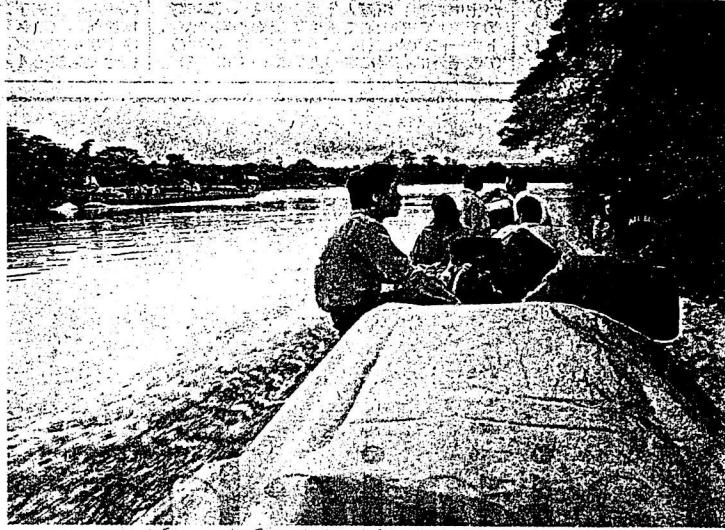
アマンの源流域、マカラ  
レナ熱帯雨林にある宣教  
音大の伊那松教授(33)の  
調査拠点「チャムサキャン  
フ」。秘境だけあって、「サ  
ルの楽園」までの道のりは  
遠い。

## マカラの森で

●南米アマゾン日誌 8/24

つた。文 大根 英二  
写真 佐藤 泰則

クアジャペロ川を行くカヌー。途中で地元の人たちとすれちがう。



## マカラの森で

●南米アマゾン日誌 8/28

### ピラニア食べて力持ち?

30分強ほど、船で奥へ進む。小川口では漁夫がいた。

さすがに、船を守るために、かわいい二人の娘が現れる。

「おじいちゃん」。コロ  
のヌメで細い支流に入っ  
る。それでも、慎重に針をさ  
す。一時間半、一本の針を  
アを食べたからだ。そん  
にあのサルの糞。「子  
なたまもみせる三日、垂らし、釣果はいい。だが、シヨークが飛び交うは  
やマサチャント」で、調査  
月湖があった。長さ10cm、  
幅さ10cmの3匹。コロに似たモイが  
あるイカリのよな針に小  
さな魚(10cm)が2匹、1匹。  
「さようは水が濁り、  
魚だけ、直径0.8mmの  
太い糸を垂らす。」

「どうして、魚が大き  
くなるんだ?」  
「よくわからない。  
夜、川の下の森で、  
食事を歸った。「あくびが  
かわたる体臭でやがてあぶつか  
れていた。」  
「おじいちゃんが、食事を歸った。  
力持つになったのは、二年  
後のこと。アカント熱帯雨林  
では、その奥に神秘的  
な世界がある。」  
「アを食べたからだ。そん  
にあのサルの糞。「子  
なたまもみせる三日、垂らし、釣果はいい。だが、シヨークが飛び交うは  
やマサチャント」で、調査  
月湖があった。長さ10cm、  
幅さ10cmの3匹。コロに似たモイが  
あるイカリのよな針に小  
さな魚(10cm)が2匹、1匹。  
「さようは水が濁り、  
魚だけ、直径0.8mmの  
太い糸を垂らす。」

「どうして、魚が大き  
くなるんだ?」  
「よくわからない。  
夜、川の下の森で、  
食事を歸った。「あくびが  
かわたる体臭でやがてあぶつか  
れていた。」  
「おじいちゃんが、食事を歸った。  
力持つになったのは、二年  
後のこと。アカント熱帯雨林  
では、その奥に神秘的  
な世界がある。」  
「アを食べたからだ。そん  
にあのサルの糞。「子  
なたまもみせる三日、垂らし、釣果はいい。だが、シヨークが飛び交うは  
やマサチャント」で、調査  
月湖があった。長さ10cm、  
幅さ10cmの3匹。コロに似たモイが  
あるイカリのよな針に小  
さな魚(10cm)が2匹、1匹。  
「さようは水が濁り、  
魚だけ、直径0.8mmの  
太い糸を垂らす。」

「どうして、魚が大き  
くなるんだ?」  
「よくわからない。  
夜、川の下の森で、  
食事を歸った。「あくびが  
かわたる体臭でやがてあぶつか  
れていた。」  
「おじいちゃんが、食事を歸った。  
力持つになったのは、二年  
後のこと。アカント熱帯雨林  
では、その奥に神秘的  
な世界がある。」  
「アを食べたからだ。そん  
にあのサルの糞。「子  
なたまもみせる三日、垂らし、釣果はいい。だが、シヨークが飛び交うは  
やマサチャント」で、調査  
月湖があった。長さ10cm、  
幅さ10cmの3匹。コロに似たモイが  
あるイカリのよな針に小  
さな魚(10cm)が2匹、1匹。  
「さようは水が濁り、  
魚だけ、直径0.8mmの  
太い糸を垂らす。」



キャンプのスタッフは釣り上げたヒートを語り合ひながら、マカラ熱帯雨林で

「ヒヤホの木の上に」ま  
すか。森の中から、稻葉  
あぐみさん(28)の声が聞こ

待つ。移動したら、観察路  
を外してしまっても違う。の橋渡をするリッジ行  
動を見た時は感動しまし

た。将来の不安はあります  
が、今しかできないことを  
したい」と稻葉さん。森の  
生活は来年1月まで続く。

## クモザルの女性研究者

8/30

文 大根英二  
写真 佐藤泰則

えてきた。神戸学院大の院  
生。コロンビア・マカレナ  
熱帯雨林にある「チャムサ  
キャンプ」で今年2月から  
クモザルの調査を続けてい  
る。「下唇が出ていてちょ  
うと不細工ですけれど、あ  
れがオスのオコです」

長い尾と腕を巧みに使っ  
て木々の間を渡りながら、  
てのひらを広げたような形  
の葉を持つセクロピアの茎  
や果実をかじっている。

午前6時過ぎ、クモザル  
は「オウ、オウ、オウ」と声  
をあげ、一緒に行動したい  
相手に呼び掛ける。その叫  
びを頼りに、稻葉さんは居  
場所を突き止め、どのザル  
がいつ、どこで何をしたか  
を書き留めていく。昼寝を  
始めれば、木の下でじっと



● 南米アマゾン日誌

稻葉さんが追いかけるクモザル。セクロピアの葉を食べる=コロンビア  
のマカレナ熱帯雨林で

巨大なヘリコニアの森を抜けて、研究者たちはチャムサキ  
キャンプを目指す—コロンビアのマカレナ熱帯雨林で



つるがからまつた樹木が  
うつそうと茂り、その中か  
ら突然、猛獸が現れる。…  
シャングルと聞い  
てイメージするの  
は、そんな映画タ  
ーザン」のような  
世界だらうか。

コロンビア・マ

カレナ熱帯雨林に  
あるサル研究の拠  
点「チャムサキヤ  
ンブ」の周辺は、  
クワ科やマメ科の  
巨木の樹冠が頭上  
を覆い、脣間でも  
薄暗い。しかし、  
下草が育ちにくく  
ので、意外と歩き  
やすい。

森の中で、いかにもジャ  
ングルといった雰囲気を醸  
し出しているのは、クマレ、  
ミルペソと呼ばれるヤシの

木、それに赤と黄の花が鮮  
やかな何種類ものヘリコニ  
アだ。バナナに似た大きな  
葉が、南国っぽ。

一見、日本のものとそっ  
くらの竹林もある。しかし、  
よく観察すると、有刺鉄線  
のよみつな鋭いトゲをもった  
枝が横に伸びている。何人  
もの日本人研究者が、タケ  
ノコの料理に挑んだが、ア  
クが強く食べられなかつた  
そうだ。文 大槻 英二

写真 佐藤 泰則

## 歩く森の研究サル

8/31

マカレナの  
森で

● 南米アマゾン日誌

キャンプの人にもすっかりなれ、毎日のように遊びに来る  
ホウカンチョウの一家＝コロンビアのマカレナ熱帯雨林で



## マカレナの森で

9/2

● 南米アマゾン日誌

### 人なつこい訪問者

野生動物の楽園ひいて  
も、ジャングルの中でお目  
当ての動物を探すのは  
意外と難しい。かと思  
うと、向こうの方から、  
ひょっこり遊びに来る  
こともある。  
コロンビア・マカレ  
ナ熱帯雨林の「チャム  
サキャンプ」。トタン  
屋根一枚の吹きさらし  
の小屋についたハンモ  
ックで昼寝をしている  
と、「ブイ、ブイ」と  
調子のいい鳴き声が聞こえ  
てきた。

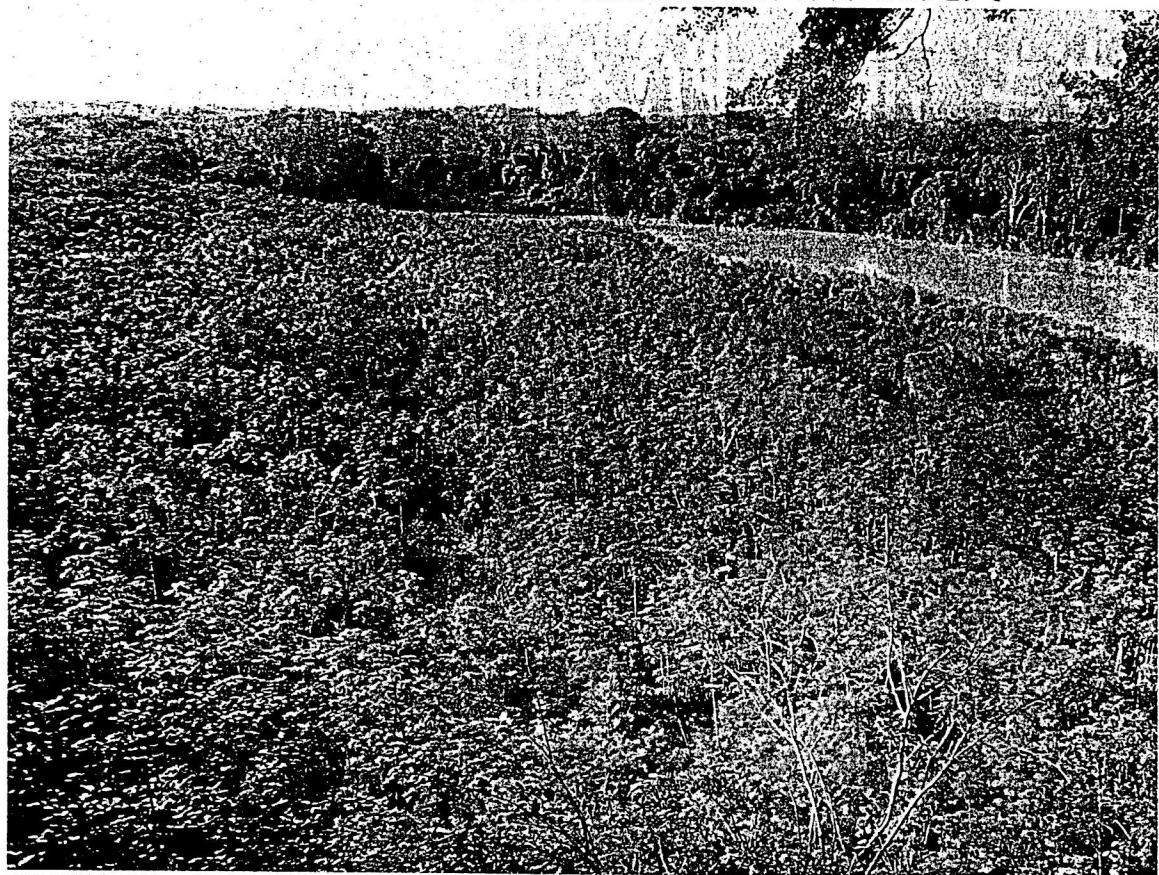
双眼鏡をのぞくと、黒い  
体にオレンジのくちばしが  
鮮やかな鳥が4羽、ちょ  
こちよこと歩いている。  
ホウカンチョウだ。トサ  
カがあり、二コトリより  
一回り大きい。ほとんど  
飛べないことがら乱獲さ  
れ、絶滅の危機にひん  
じている。

ロス・アンデス大(コ  
ロンビア)出身で現在は  
米ミズーリ大院生、イワ  
ン・ヒスノスさん(30)ら  
のグループが、この森で2  
つがいのホウカンチョウの  
採食行動を調査している。  
落ちている木の実やミミ  
ズ、ベビを捕まえて食べる  
といふ。

忍び足で近づくと、4羽  
の「訪問客」は、また「ブ  
イ、ブイ」とつぶやきなが  
ら森の中に消えた。

文 大槻 英二  
写真 佐藤 泰則

多様な動物たちの営みを包み込むマカレナの熱帯雨林。右奥はドゥダ川＝コロンビアで



## マカレナの 森で

● 南米アマゾン日誌

### 自然に学ぶ

コロンビアのマカレナ熱帯雨林には、30万haの手つかずの大自然が残る。森を一望できる展望台に立って、深呼吸すると、できた酸素の濃さを実感する。

この森が、開発の危機にさらされたことがある。1986年、総断道路の建設図が浮上したのだ。富城教育大の伊沢裕生教授(59)らが、「陸のガラパゴス島・マカラナ地域を守る基金」を設立し、日本からの募金、開発予定地を賣い取った。計画は中止された。

「子供たちがじかに熱帯雨林を体験することが、将来にわたる保護につながる」(伊沢教授)。93年には熱帯雨林学習センターが建設され、教員の研修やドゥダ川などの流域の子供たちの自然観察の場として使われている。

伊沢教授とともに研究・保護活動を進めるロス・アンデス大(コロンビア)のカルロス・メヒア教授(56)は生物学では「流域の入植者たちは今でも道路がほしいと考えているだろう。しかし、それ以外のコロンビア人はこの森を守りたいと思っている」と話す。

熱帯雨林の貴重さを次代に伝える地道な努力が求められている。||おわり

写真 大槻 英二  
佐藤 泰則



# 2000年・横浜市立大学探検探査の会総会 議事録

日 時：2000年4月22日(土) 15時～  
会 場：いせやま会館

## 議事次第

### 1. 出席者紹介

- ・高井主税、穂積拓夫、佐々木仁、川尻哲夫、田村康一、小森享二、高松康夫、河合武臣、佐藤修史、小林剛、室小野花（現役4年）、佐藤明（現役3年）、熊原武博（現役4年）の計13名

### 2. 会計報告

- ・会計担当佐々木より。詳細は別紙会計報告参照。
- ・過年度の徴収記録が正確でないため、2重に会費を支払っているケースがあるとの指摘を受けた。思い当たる方は会計担当佐々木まで、ご連絡ください。

### 3. 会報、40周年記念文集の作成について

- ・会報は新たに現役に原稿依頼を行った。
- ・40周年記念集は今年の11月までに作成する。新規に原稿依頼する。

### 4. 活動報告

- ・ボリビア遠征は報告書にまとまり、学長賞をゲットした。
- ・昨年度はボリビア遠征以外は低調で、夏合宿に予定していた無人島も中止した。
- ・学際は酒類の販売が禁止になった。
- ・現役は2、3年生が4名と少なく、今年度の部長が休学するなど弱体化が懸念されている。最近の学生は部活等の学内集団行動を嫌う傾向にあり、新入部員の確保も難しい状況。

### 5. 活動計画

- ・特になし。穂積拓夫より、メキシコ遠征の誘い。

### 6. その他

- ・総会終了後の懇親会には、平塚洋介（1994年入学）、中村淳一（現役4年）が合流。

## 1999年度 探検探査の会 会計収支報告

(1999年4月1日～2000年3月31日)

### a) 収 入

(単位:円)

◆ 会 費 収 入	-----	78,000
◆ 利 息	-----	204
◆ 小 計	-----	78,204

### b) 支 出

◆ 郵 送 代	-----	21,360
◆ 文 具	-----	2,625
◆ 会 議 費	-----	2,625
◆ 会 報 製 本 費	-----	39,060
◆ ポリビア隊壮行会補助	-----	32,000
◆ そ の 他	-----	262
◆ 小 計	-----	97,932

c) 单 年 度 収 支 ----- -19,728  
(= a - b )

d) 前 年 度 繰 越 金 ----- 204,561

e) 収 支 計 ----- 184,833  
(= c + d ) (翌年度へ繰り越し)

1999年度 会計監査の結果、特段の指摘事項はありませし

2000年 4月20日

鈴木 元視



## 会員近況紹介

### 伊藤 源 (1989年入学、アメリカ在住)

ファーストネームが GENTA から GARY になりました。重みがある名前でしつくりきません。(でもまあ、ビジネスネームなのでいいでしょう。)

4/23 にとうとう終わりました。終わってしまいました。結婚式ってつかれますねえ～。

### 小森 享二 (1968年入学)

昨年、満 50 歳になったのを記念して、妻と二人だけでハワイ旅行を楽しみました。ハワイ島とオアフ島の二島でマウナケア火山での天体観測、乗馬、スキーバダイビング、パラセール、ジェットスキー、ヘリコプター観光、スキンダイビング、島内バス観光と目一杯いろいろなことにチャレンジしました。

この旅行をきっかけに昨年 11 月から妻と二人で本格的にスキーバダイビングを始めました。月一回のペースで潜っています。

### 荻野 諭 (1996年入学)

4 月に就職しまして、長野県の牧尾ダムという所で用地買収の仕事をしています。こちらはまだ寒く、夜は 0 度を切ることも珍しくないということで、ダウンジャケットをまだ着ています。

桜もまだ開花しておらず、4 月末くらいに咲く予定で、今年 3 回目の花見を楽しみにしています。

御岳や木曽駒ヶ岳も近いので、是非その折にはお立寄りください。

### 星川 亮 (1994年入学)

職につけずにフリーターをやっております。

### 熊沢 憲 (1981年入学)

引っ越しました。4 月からは主としてジャカルタと成都で仕事する予定です。

### 佐々木 鉄明 (1982年入学)

勤めている会社が潰れそうです。ここ 5、6 年は観光でマレーシア、インドネシアの熱帯雨林の動植物を見にいっています。

35 歳をさかいで人生守りに回ってしまったことを実感する今日このごろです。

### **伊吾田 宏正（1992年入学）**

3月で東大の修士課程を終え、4月からは北海道大学農学部演習林の博士課程に所属します。

研究はこれまでのエゾシカの季節移動を継続して追跡していきます。所属は変わっても、白糠のフィールドへ毎日通う生活スタイルは変わりません。

### **師井 佳子（1982年入学）**

高所恐怖症で飛行機×、吊り橋×、瀬戸大橋を車で渡る時も左側車線がコワくて隣の車線をまたいで運転していた主人がハイキングに行く気になったので、GWは久々にとっても低い山に行くつもりです。

結婚する前に「お願いだから登山はやめてくれ」と頼まれて以来、ホントに久しぶりに足慣らしから始めるつもりで、楽しみにしています。

### **小森 啓志（1990年入学）**

引っ越しました！総務兼任の役得を生かしてオシャレな8階建てマンションを寮として借りて、いちばんいい部屋に陣どっています。ベイブリッジやランドマークタワーが丸見えです。注）反町公園はホモのたまり場なので要注意です。

### **菅井 智昭（1994年入学）**

今春卒業しまして、新潟大学で博士課程に進学します。

### **宮崎 捷二（1961年入学）**

今夏は高校登山部顧問の有志とキリマンジャロ登山と自然公園観察の予定でいます。今までの遠征（インドヒマラヤなど）と違って観光旅行的ですが、5,900mの高さ故甘くはみていません。

1ヶ月 100km を超える様にコツコツ走っています。

### **高梨 洋之（1985年入学）**

3月の定期異動で広島県呉市の勤務となりました。今度の配置は経理部契約係長ということで、なにかと注目されるので新聞等を賑わせることがないようにしたいと思います。

### **佐藤 修史（1987年入学）**

大変残念ですが、当日は仙台に出張しています。またの機会を楽しみにしています。

### **浅香 辰也（1983年入学）**

事情により今回も欠席させて頂きます。ご盛会を祈念しております。

### **小島 広海（1970年入学）**

4月22日（土）は残念ながら、仕事のため欠席させてもらいます。皆様に宜しくお伝えください。

### **松林 孝憲（1993年入学）**

仕事のため出席できません。何かおもしろい企画があれば是非……。最近私自身マンネリ化してきた??ので……。

### **河合 武臣（1961年入学）**

私もいよいよあと1年後に年金生活をむかえる年になりました。この1年を自然に、日々を味わいながら過ごしていきたいと思っています。

気は若いつもりですが、スポーツをして少し無理をして肘を痛めてしまいました。筋トレなどして積極的に治そうと頑張っています。

さて、日本の政治は私の身体よりひどいようです。銀行の不始末やゼネコンのもうけのため大金を注ぎ、国民生活には冷たい通りすぎ、はぎ取り強盗行為。私は年金を減らされ、若い人は5年間とり上げられました。選挙でかたきうちよりないようですね！

### **野口 道章（1977年入学）**

昨年6月に左足首を骨折し、夏シーズンから秋にかけて計画の登山や旅行がすべてダメになり1年間全く運動もできませんでした。おかげで4kgも太り、身体が重くて困っています。今年もいよいよシーズン到来で何かチャレンジしたいと思っている今日この頃です。

何か短期で参加できる企画があればやりたいです。みな様によろしく。

### **児玉 亮（1990年入学）**

連絡が遅くなってしまい申し訳ありません。仕事で出席できませんが皆様によろしくお伝えください。

このほか、川尻哲夫さん、三浦研さん、小林剛さん、本多秀雄さん、高井主税さんからも出欠ハガキ頂きました。

## 編集後記

8号をお届けします。編集が遅くなってしまいお詫びいたします。  
今回は、学生部を中心とするボリビア日本人移住100周年記念探検隊に関する記事が多くなりました。学生部の報告記事は報告書から転載させていただきました。また、現地を取材した大槻氏のボリビア報告記事は、貴重なもので資料提供していただき誠にありがとうございました。アマゾン日誌ともどもぜひお読みください。

会員のみなさんも何かと忙しい日々を過ごしていることでしょう。そして、それぞれの場で元気でがんばっていることでしょう。この冊子を親睦交流の場に役立ててください。

それでは、ますますのご活躍を祈って・・・・

### 探検・探査 第8号

発行年月日 2000年7月

発行者 横浜市立大学探検・探査の会

代表 大野正夫

編集 探検・探査の会編集委員会

祝！4000hit

幹事長小森氏、chico三浦氏降臨中！  
小嶋健太もブラジルから参戦中！

探検部羅針盤へようこそ

あなたは**04000**番目のお客様です



<http://www.gld.mmtr.or.jp/~miura-kr/>